

JAICOH NEWS LETTER

NO:58 2009年9月発行



歯科保健医療国際協力協議会

Japan Association of International Cooperation for Oral Health

事務局: 〒341-0003 埼玉県三郷市彦成 3-86 Tel&Fax: 048-957-2286

発行: 深井穂博 編集: 榎崎正子、梁瀬智子

すっかり秋らしいこのごろですが、皆様いかがお過ごしでしょうか？

夏真っ盛り暑い中、7月18日、19日とJAICOH学術集会と20周年記念式典が東京医科歯科大学で開催されました。ポスター発表に記念式典と大いに盛り上がりました。参加していただいた皆様本当にありがとうございました。実行委員の鈴木基之先生、小原真和先生、中久木康一先生、阿倍智先生お疲れ様でした。発表の内容はまた次号以降に載せていきたいと思ひます。

今号は、実行委員の小原真和先生、中久木康一先生、学術大会でポスター発表をしていただいた沼口麗子先生、7月にモンゴルへ行かれていた黒田耕平先生、寄稿していただきました。



(ポスター発表 沼口先生、座長中久木先生)



(懇親会挨拶 小原先生)

JAICOH20周年記念事業実行委員に携わって

ネパール歯科医療協力会、東京都品川区開業 JAICOH理事
小原真和

平成20年7月の第19回JAICOHの総会において、翌年20周年を迎える協議会において節目となる記念事業を行うことが決まりました。事業開催の実行委員として、副会長の鈴木基之先生、理事の中久木康一先生、理事の阿倍智先生と私の4名が決まり、深井会長のサポート役としての実務部隊として編成されました。

歯科保健医療国際協力協議会は、「歯科の国際保健医療協力を語る会」を前進として、1990年9

月に設立されて以来、カンボジア、ソロモン諸島などでの協力活動を行ってきたと共に、特に 2000 年度以降は、歯科保健医療を中心として国際協力分野で活動する団体や個人の情報交換・連携のための協議会開催、人材育成のための小規模国際協力活動の助成を主な事業内容とし、歯科保健医療協力にかかわる NGO の連携を図ってきています。その事を念頭において 20 周年記念事業の開催目的について協議し「20 年間の歯科保健医療国際協力協議会活動の社会への告知と、20 年間の協議会活動を支えて頂いた方々への感謝」といった内容を柱とすることとなりました。

実行委員会の実際の活動は約半年前から開催し、先ず具体的事業として、学生会シンポジウム、学術集会、記念式典、記念講演、懇親会を企画しました。

<学生シンポジウム>

シーズプロジェクトという学生を中心とした若い国際協力に携わっている人達との交流を密にして、今後の協力会を考えて見てもその原動力になるように今回の記念事業に多数の参加者が集まれるような企画内容にしました。国立オリンピック記念青少年総合センターを会場とし、宿泊施設も利用して遠方からの出席にも対応できる状況を設定しました。

<学術集会>

通年ですと、その一年に行われた活動報告のプレゼンを行っていましたが、今回は 20 年の総括として、また NGO ディレクトリリー作成のための準備として、各団体の組織内容や過去の活動状況の報告会とし、ポスターセッション形式にて集会を行うことにしました

<記念式典>

毎年 JAICOH を陰ながら支えるべく多大な寄付をされている会員の方がおられます。協議会活動を支えて頂いた方々への感謝、挨拶として会の発足当初 10 年間の前会長の挨拶、そしてその後 10 年間の現会長の挨拶、また日本歯科医師会からの後援組織でもあるので、来賓挨拶をこの式典の中に盛り込むことを考えました。

<記念講演>

日本国際保健医療学会前理事長で、自治医大名誉教授の石井明先生に「口腔保健の動向と歯科保健への期待」というタイトルで、歯科界以外の幅広い観点からの内容に期待し、同時に深井稔博現会長に「国際保健医療協力における歯科保健・口腔保健の役割」の内容で講演を行いました

実際に、学生シンポジウムには 40 名近い若い方々が集い、お互いの苦労話や今後の活動での有効な情報を交えながら積極的な交流会となりました。また翌日の学術集会では学生から 4 題、一般から 11 題、合計 15 題のポスターが出揃い、各組織団体の活動紹介が行え、また質疑では特に若い学生や先生方が大変参考になる活動におけるヒントやアドバイスが活発にされていました。また、式典、記念講演、祝賀会での人数的な盛り上がりも約 50 名の参加を得て、充実した記念に残る会となりました。

理事会、その後の総会での議決で、現会長が来年 7 月に 10 年目を迎えますが、それを会としての 20 年目の節目の年として、それから先の JAICOH の活動のあり方をこの一年をかけじっくり意

見を出し合い考えていく事になりました。そのための調整役として準備委員会の立ち上げも決まりました。

記念事業を通じて、各組織団体、会員の方々の交流と共に、JAICOH 組織の 20 年目としての総括がこの事業で出来ました。そしてさらに今後の JAICOH のあり方を十分に検討するその準備のきっかけとなった事も、この事業開催での大きな意義を感じる事が出来ました。

JAICOH に参加していると思うこと ～“歯科の支援”とは～

東京医科歯科大学顎顔面外科学分野 JAICOH 理事
中久木康一

10 年ぶりに JAICOH に参加したら、だいぶ雰囲気が変わっていた。歯科大学に国際保健サークルができたからか、歯科学生からの発表もあった。しかし、スクリーンに映し出される、学生が海外で歯みがき指導している姿には、何か違和感があった。

いわゆる「支援」や「ボランティア」には、団体ごとにスタンスの違いがあり、個人ごとに温度差がある。そもそも歯科の支援とは、どうあるべきなのだろうか。

まわりが「歯が悪いからどうにかしてあげたい」と思っても、当の本人は「困ってない」ということは往々にしてある。健康相談をしても“健康格差”を抱えた低所得者層に歯科のニーズは低く、「歯が悪いのはわかっているからみせたくない」「何度も通わないと治療できないから面倒」などと言われて寂しい思いをすることも多い。「歯医者は嫌い」と初対面の人に言われるのは気分よくないが、たまに真剣に話を聞いてくれて「歯科の相談を受けられてよかった」と言ってくれる人もいる。

限られた人々とのつきあいしかなく、食べるものにも事欠くような生活をしていれば当然、関心事は遠い将来の歯の状態よりも、食べ物や寝場所をどう確保して明日を迎えるかという差し迫った問題点であることは理解できる。痛いというなら別だが、歯なんてなくてもなんとか生きていけるものである。歯科のニーズというものは、生活がなりたち、食生活が安定し、見知らぬ人とも笑顔で笑いながら話せる環境があり、そして出てくるものではないだろうか。

支援するほうは自分の価値観での「良いこと」をしてあげようとする。しかしそれは、本人にとっての「居心地の良いこと」ではなかったりする。価値観は押し付けられるものではなく、結局は何も変わることはないし、変えられるものもない。変えられるのは、支援側の体制であったり、心持ちであったりしかない。

では、歯科の支援とは、どうあるべきものなのか。その答えは、対象や環境、目的によって違ってくるものであり、最も必要なものは歯科的知識や技能ではなく、彼らの生活背景を知ること、知ろうとすることであろう。そうすることにより初めて、問題点が見いだせ、何が必要なのかが明確になるはずである。

個人的には、学生には歯みがき指導なんかしていないで、井戸を掘るとか幼稚園を作るとか、世界中を放浪するとか、いろいろな経験をして欲しいとも思う。歯科なんて、あとで嫌になるほどやるから！

2008 年度モンゴルとの歯科医療交流活動報告

日本モンゴル文化経済交流協会 黒田耕平（生協なでしこ歯科）

最近では、モンゴルとも携帯電話でもインターネットでも簡単に連絡が取れるようになり、日常的な相談から交流活動の準備まで毎週のように話し合えるようになりました。ただ、実際には言葉の問題だけでなく、習慣の違いからかかみ合わないことも多く、必ずしもうまくいかないのも現状です。

「第9回モンゴル健康づくり活動」は、7月11日～18日、参加人数は4名で行いました。その活動内容は、①以前行った予防プロジェクトに参加したフブスグル県、ブルガン県を訪ねてその後の予防活動についての聞き取り、②エネレルの職員旅行の企画・同行と交流、③障害者施設での訪問歯科治療・予防活動、健康チェック、④エネレル職員へのセミナーと歯科診療指導、等でした。

「第18回モンゴル歯科探検隊活動」は、9月8日～14日、参加者は10名（岡山大学歯学生4人、看護大学生2人を含む）でした。活動内容は、①ウランバートル郊外に住む遊牧民を対象に健康チェック（体脂肪率、血圧、尿チェック、尿塩分チェック）、歯科治療・歯石除去・人形劇による予防指導等、②孤児院で虫歯予防の人形劇（日本学生が準備）・歯磨き指導、③障害者施設で、今回も歯磨き介助、歯石除去、訪問歯科治療、事前学習を行った日本人学生達も介助磨きを体験、④両国歯科学生交流では、日本学生から4つのテーマでプレゼンテーションと他3題のセミナー、その後活発な意見交換、⑤エネレル診療室での歯科診療助言では、矯正、歯冠補綴（ブリッジ）、過剰歯、義歯等々の相談、中には義歯による舌潰瘍のクリームや、他院の前歯部ブリッジのクリーム等もあり、新しい治療技術を急速に取り入れているモンゴル歯科医療の問題点を感じさせられる、⑥エネレル職員へのセミナーでは、「幼若永久歯の治療と予防の対応」と他セミナー3題と、日本学生達のプレゼンテーションを、⑦モンゴル国初主催の国際障害者歯科フォーラムへの参加し、教育講演の形で1時間20分黒田とセンベ先生（エネレル歯科医師）が、「日本における障害者歯科治療の実際と障害者施設での保健予防活動、18年間にわたる日本・モンゴル歯科医療交流、エネレル歯科によるモンゴルの障害者施設での保健予防活動の取り組み」について発表、等を行いました。

モンゴルのエネレル歯科診療所はほぼ自立できていますが、公衆衛生活動ではまだ十分な役割が果たせていません。学生交流と共に今後の中心的交流活動として取り組む予定です。

私事ながら黒田の手術入院のため、今年度は「冬のセミナー」活動や「来日研修生の受け入れ」は実施できませんでした。



遊牧民への訪問歯科活動



国際障害者歯科フォーラムでの発表

カンボジア日本友好年 2008 事業

「オカリナコンサート&パネルシアター「ねずみの歯ブラシやさん」」を終えて

NPO カムカムクメール代表 沼口麗子

私たち NPO カムカムクメールは、2006 年から「カンボジアで噛める歯を育てよう」活動を実施しています。年に 2 回歯科衛生士と一緒にカンボジアを訪問し、僻地の小学校、孤児施設、移転地集落などで、検診、健康教育、歯磨き指導を行っています。昨年は、日本カンボジア友好 55 年事業の一つとしてコンサートイベントを実施し、大変楽しい体験でしたので、その報告をいたします。



2008 年 8 月 30、31 日の二日間、オカリナ奏

者高木陽光様とその門下生そして在カンボジア日本大使館のご協力で、プノンペンとシェムリアップの 2 都市で、コンサート&パペットショーを開催しました。

一日目は、孤児施設の子ども達 200 名を招待してプノンペンの日本人材開発センターの大ホールで行いました。クラシックからカンボジア流行歌まで幅広い選曲で、オカリナの演奏は圧巻でした。子ども達は、その自然で透明感のある音にすっかり魅了され、からだを揺り動かし楽しんでいました。立体パネルシアターは、オカリナ BGM のおかげで格調高い人形劇になり、子ども達が夢中になっている様子に私たちの苦勞も吹き飛びました。

二日目は、シェムリアップ市のスナダイクマエ孤児施設で行いました。コンサート、パネルシアター、オカリナ体験と歯磨き指導ができ、大変有意義な活動になりました。

孤児施設の子どもたちを引率してくれた JICA シニアボランティアの方から「とてもいい活動でした。子ども達の心に残ったと思います。子ども達が喜ぶのが一番ですから」と嬉しい感想をもらいました。

私たちは歯の専門家ですので、歯を磨いてほしい、歯を大事にしてほしい、自分の健康は自分で守ってほしい、と願っています。しかし、歯のことだけ声高に叫んでもなかなか効果はあがりません。自発的にできる環境や心づくりが必要です。



子ども達に伝えたい事は山ほどありますが、一番大事なことは、信頼してもらうこと。

噛める歯を育てる事は、子ども自身を育てる事です。カムカムの活動は、技術移転だけではなく、幅広くネットワーク作りをして子ども達の夢を育てる活動でありたいと思います。

追伸：オカリナは現在クメール焼きのオカリナ制作プロジェクトが進行中で、子ども達がクメールオカリナで演奏できる日が近いかもしれません。大変楽しみです。

第 40 次ベトナム口唇口蓋裂診療隊参加者募集

日本口唇口蓋裂協会では日本医学歯学情報機構他関係団体で協力の上ベトナム社会主義共和国南部メコンデルタで枯葉剤を多量に散布されたことで有名なベンチュ省グエンデンチュー病院において、口唇口蓋裂の人道援助を目的とした診療隊を派遣致します。

同診療隊は香月武名誉教授、柳沢繁孝名誉教授、中村典史教授他口唇口蓋裂手術の我が国を代表する先生の手術助手等にお手伝い頂ける先生を募集致します。診療隊は総数 40 名程です。(2008 年度 44 名)

日程 平成 21 年 12 月 18 日 (金) ~12 月 27 日 (日)

対象 医師、歯科医師、看護師 (手術室勤務の経験のある方)、歯科技工士、医学部・歯学部・看護学の学生等

(その他詳細は個々お問い合わせ下さい)

※健康上に問題のない方、70 歳以上の方は診断書の提出をお願いしております。

参加費 25 万円 (国際線、宿泊費、食費、ビザ取得費、ベトナム国内の援助費及び診療に必要な手袋代等を含む) 白衣その他はご持参下さい。

今年の夏は比較的涼しかったですね。私にとって最も暑かった時は、御茶ノ水駅から J A I C O H 学術大会の会場の東京医科歯科大学までスーツを着て歩いていた時かもしれません。今年はポスター発表で、例年より演者と受講者の距離が近く、質疑も活発でとても熱気にあふれていましたね。来年もまた楽しみです。(榎崎正子)